

「天国へのお引越しは 安心して任せて」

キーパーズ代表取締役

吉田太一(よしだ たいち)さん



映画「アントキノイノチ」(さだまさし・原作)のモデルがキーパーズの吉田太一(48歳)さん。その吉田さんを平和島の事務所へお訪ねした。2002年に日本で初の遺品整理専門会社を立ち上げた人だ。

この仕事を思いついたのは、引っ越し荷物の整理に行ったとき。故人の残した大量の荷物を「ぜんぶ片づけましょう」と申し出ると「ほんとやってくれるの、神様に見えるよ」の会話から得た。時代のニーズとお金をかけても早く処分したい遺族の気持ちを取った。「遺品整理を専門にパッケージ化し、サービスにしよう」と思いついた。

もちろん当時、「遺品整理」の業種などなかった。ホームページやメディアを使って「遺品整理」の用語をPR、ビジネス化した。「天国へのお引越し」がキャッチコピーの遺品整理専門会社「キーパーズ」、今では年間1600件の遺品整理を扱い、講演に全国を飛び回る。

いま「孤立死」が社会問題化している。仕事柄さまざまな「孤立死」に出合う吉田さん。「孤立死を明確に定義できません。あえていうなら、社会から孤立している人が年とって死ぬ

こと。お年寄りの孤立死ばかり注目されますが、むしろ50代60代の働きざかりに増えているんです」。退職後の男性に生きる目的がなくなり、他人とかわからなく「孤立死」するパターンが多いという。「30代40代で他人にかかわらない生き方をする人が増えています、孤立死予備軍ですよ。この先の日本が思いやられます」と嘆く。

「故人の部屋を訪れて見ると、その方の生きざまがそのまま残されています。孤立死した人の部屋は生きるためのバランスが取れていない気がします。たとえば、物が壊れたら直す、からだが悪いのなら病院へ行く、近所づきあいや親子関係に問題があったら解決する努力をするなどしてバランスを取りつつ、自立して生きるという意識をもつことが大事なんです」。

遺品整理業の仕事が増えているのは時代の要求かもしれないと感じた。D

(文・望月幸代
写真・廣瀬真也)



- ①「おひとりさまでもだいじょうぶノート。」(キーパーズ)
- ②「私の遺品をお願いします。」(幻冬舎) 遺品整理キーパーズ
<http://www.keepers.jp/>